

様式 1

論文審査の結果の要旨および担当者	
学位申請者	吳 松涛
論文担当者	主査 篠原 尚
	副査 辻村 亨
	副査 廣田 誠一
学位論文名	The Effect of Daikenchuto, Japanese Herbal Medicine, on Adhesion Formation Induced by Cecum Cauterization and Cecum Abrasion in Mice (マウス盲腸焼灼および擦過による腹腔内癒着形成モデルを用いた大建中湯の癒着抑制効果の検討)
論文審査の結果の要旨	
<p>術後癒着は慢性腹痛や腸閉塞を生じる原因となる。組織学的には膠原繊維の蓄積および免疫系細胞の集積を特徴としており、癒着促進因子として、Interleukin-17 (IL-17), Substance P (SP), Interferon-γ (IFN-γ), Plasminogen activator inhibitor -1 (PAI-1) などが報告されている。現在、臨床では、術後腸閉塞患者の症状緩和を目的として大建中湯が用いられているが、癒着形成機転そのものへの抑制への関与は検討されていない。そこで申請者らは、盲腸焼灼および盲腸擦過によるマウス癒着モデルを用い、大建中湯周術期経口投与による術後癒着抑制効果を肉眼的、組織学的、および癒着促進分子の遺伝子発現変化の面から検討した。</p> <p>焼灼モデルにおいて、術後 24 時間以内に IFN-γ, PAI-1, IL-17 および SP 遺伝子発現が、擦過モデルにおいても PAI-1 と IL-17 遺伝子が有意に上昇することを確認した。ただ、両モデルとも術後 7 日目における大建中湯投与群の癒着形成は、コントロール群に比べ肉眼上有意な抑制は認めず、コラーゲンの蓄積や白血球の集積からみた組織学的評価においても有意な差は認めなかった。また、大建中湯投与による術後 6 時間後の癒着促進因子の発現抑制も認めなかった。</p> <p>以上のように、今回の動物実験では、大建中湯が術後癒着形成機転そのものを抑制するという仮説を証明することはできなかったが、本研究は外科治療の永遠の課題である癒着形成に焦点をあて、慣習的に使用されている漢方薬の作用機序の解明を目指した重要な基礎研究であり、学位論文に十分値するものと評価した。</p>	